文書館だより
ふみくら
文庫

第 32 号
2015年11月2日発行

藤沢市文書館
〒251-0054 藤沢市朝日町12-6
TEL 0466-24-0171 FAX 0466-24-0172
藤沢市文書館 検索
http://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/ クリック！

市役所御所見支所の開設（金子むつみ家文書）

参照：『(続)藤沢市史 本編1 都市化と市民の現代史』(2011年)

左の写真は、1955(昭和30)年の藤沢市と北部地域の町村との合併に伴い、それまでの御所見村役場を市役所の御所見支所（現在の御所見市民センター）と改名する際の、当時の金子小一郎市長(左)と小泉修三郎・元御所見村長(右)による看板の架け替えを撮影したものです(1955年4月5日)。この合併によって現在の藤沢市域が確定しましたが、藤沢の市制施行(1940年10月1日、初代市長：大野守衛)以降、ここまでたどり着くには紆余曲折がありました。

鎌倉の市制施行(1939年11月)および周辺の町村合併へ向けた動きを受けて、藤沢市は周辺自治体との合併交渉を本格化させました。鎌倉郡に属していた村岡村では都市インフラの整備を求めていたこともあり、1941年6月1日に藤沢市と合併しました。また、横浜市との合併が取りざたされていた六会村は教育・道路・治水などへの財政支出を藤沢市に求めていましたが、藤沢市が全面的に受け入れたことで、1942年3月10日に合併しました。

片瀬町については、戦前から交渉が続いていましたが、飛島繁市長時代の1947年4月1日に藤沢市と合併しました。そして「昭和の大合併」で御所見村・渋谷町の一部・小出村の一部と合併して、現在の藤沢市ができたのです。(中村)

藤沢市役所御所見支所の開設 ……1
収蔵資料展「合併60年　藤沢北部の発展」…2
古記録を読む ……3
文書館刊行物のご案内 ……4

収蔵資料展
「合併60年　藤沢北部の発展」のごあんない

〔期間〕2015年11月2日(月)～12月11日(金)
〔会場〕藤沢市文書館3階展示室
〔時間〕午前9時～午後5時
（土・日・祝日は休館）

2015(平成27)年は長後・御所見・遠藤の北部三地域の合併から60年の節目の年にあたります。これを機会に、北部地域の合併の経緯と意義についてふりかえる収蔵資料展を開催します。

戦後の民主化の流れの中で、たとえば警察や消防の自治体移管など国や県からさまざまな権限が市町村に移譲され、六三制施行にともない、各自治体は新たに中学校を建設する必要が生じました。そのため、各自治体は重い財政負担にあえぎます。そのような中、GHQ が1949(昭和24)年に招聘した税制使節団の答申である「シャウプ勧告」が地方自治にも言及し、地方自治体の財政基盤の強化を提案します。これを受けた政府は自治体の適正人口を8,000人と算出し、町村合併促進法を1953年10月1日に施行します。こうして、いわゆる「昭和の大合併」が始まりました。

神奈川県は町村同士の合併による新自治体設置を模索していましたが、高座郡南部の渋谷町や御所見村、小出村は藤沢市や茅ケ崎市、大和町など既存自治体から合併の誘いを受けていました。人口8,000人に満たない御所見・小出の両村は合併の必要性を認識する一方で、町村同士の合併には否定的で、御所見村は藤沢市との合併を決定しました。小出村はどちらかといえば茅ケ崎市との結びつきが強く、藤沢市合併を望んだ遠藤を切り離した分村合併を行いました。

渋谷町は人口1万人の規模で、住宅地として伸びるには財源が不足することから、合併を検討します。しかし、大和町ほかとの合併を指向する中北部と、藤沢市との合併を求める南部とで意見が割れ、結果的に分町を選択しました。こうした紆余曲折の末に、1955(昭和30)年4月5日に北部地域が藤沢市と合併し、現在の藤沢市域が確定したのです。

今回の展示ではこうした合併の経緯を示す資料だけでなく、合併とのかかわりの深い都市計画に関する資料、あるいは合併記念式典での式辞や合併記念湯呑茶碗など、様々な資料を展示します。ぜひご覧ください。(澤内)

写真は1955年5月5日に湘南高校講堂で行われた 合併祝賀式典の様子（秘書課永年保存文書「合併祝賀式典文書」より）

古記録を読む　第５回
『天養記』とその時代

伊勢神宮内にある神宮文庫には、『天養記』(国指定重要文化財)という資料が収められています。この資料は、平安時代後期の藤沢地域、特に伊勢神宮の荘園であった大庭御厨について知るための貴重な資料です。そこで今回は、資料が作成された「天養」という時代、そして資料の中で記された源義朝(頼朝・義経らの父)の大庭御厨侵入に関する記事を紹介したいと思います。なお「鵠沼」の地名が歴史上で登場するのは、この資料での記述が初めてです。

★「天養」という時代相

元号の「天養」とは、西暦1144年から45年のわずか 1 年だけです。この年は「甲子(きのえね)」にあたり、讖緯(しんい)説という考え（十干・十二支の組み合わせによって帝王が変わるという中国で起こった考え方）では世の中が変革するといわれた時期でした。改元されたのは康治3年2月23日(太陽暦では1144年3月28日)でした。

この年の正月元旦に石清水八幡宮の釜殿が鳴動する事件が発生したのをきっかけとして、地震の群発などの天災が続きました。その一方で、後の平氏政権の基礎をつくった、平忠盛(清盛の父)が正四位上に叙任されたのもこの年です(この時から忠盛は、武士として初めて宮中の清涼殿に昇ることを許されました)。

翌天養2年4月には彗星が現れるようになり、天変地異を鎮めるための祈祷が行われています。さらに東大寺と興福寺の僧兵同士の対立や、宮中での占いをめぐる相論などもあり、政治も社会も混乱していました。鳥羽法皇自らも仏教における国家のあり方を説いた仁王経を読み、天下泰平を祈りましたが、ついに天養2年7月22日に「久安」と改元されました。

★『天養記』にみる源義朝の悪行

『天養記』には1134(長承4)年閏12月から1145(天養2)年3月までに書かれた、10通の文書が収められています。その中で特に、天養2年2月3日に出された文書の内容を中心に紹介します。

大庭御厨は高座郡に属するものとして、四方の境界が定められていましたが、現在の寿福寺(鎌倉市)辺りに館を構えていた義朝は、天養元年に鵠沼郷が鎌倉郡に属すると言いががりをつけて、俣野川(現・境川)を越えて大庭御厨に乱入しました。また9月8日・9日には、清原安行らの在庁官人を遣わし伊勢神宮に納めるための魚を奪ったり、勝手に大豆・小豆などの作物を刈り取ったりしてしまいます。それに対し大庭御厨の神人(現・鵠沼皇大神宮の神職と思われます)は抗議を行いましたが、義朝は夜中に多くの軍兵を引き連れて、理由なしに郷内の住人を捕えて連行しようとしました。御厨の神人が、理由を尋ねに現場に赴いたところ、頭に重傷を負わされました。さらに義朝は、たまたま用務で来訪していた熊野神社の神官8名に対し、重い傷を負わせてしまうという事件さえ起こしたのです。

以上が2月3日付の資料の内容ですが、別の資料では翌10月下旬に義朝たちが、1000騎以上で御厨に侵入し、悪行を尽くしたことが記されています。この事件がひとまず収まるのが翌年3月で、義朝の御厨への悪行停止が命じられます。それに関連して、この時に義朝は、下総国の相馬御厨(範囲は現在の茨城県取手市・守谷市から千葉県我孫子市・柏市・流山市の辺りにかけた地域)を伊勢神宮に寄進しています。そのことで、大庭御厨の事件の後始末をつけたということができます。

「天養」という時代は、地震や彗星の出現といった自然現象に加え、新興勢力である武士の台頭が目立った時代であったと思われます。(伊井)

参考：吉井宏「源義朝押妨事件と大庭氏」(『日本史小百科 荘園』所収、近藤出版社、1977年)、五味文彦「大庭御厨と「義朝濫行」」(『茅ヶ崎市史研究』3所収、1978年)、伊藤一美「神宮文庫所蔵『天養記』所収文書の基礎的研究(2)」(『藤沢市文化財調査報告書』第42集所収、藤沢市教育委員会、2007年)

文書館刊行物のご案内

昨年度末（2015年3月）に発行された、当館の刊行物を紹介します。

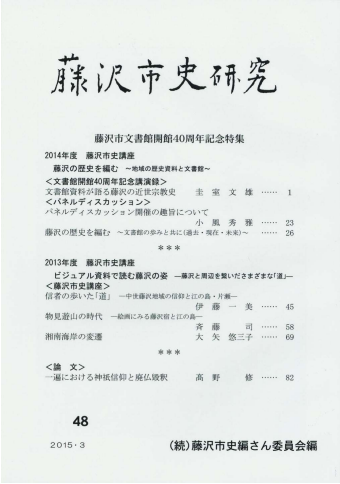
『藤沢市史ブックレット6　大庭御厨（みくりや）に生きる人々』（800円）

藤沢市には、かつて「大庭御厨」と呼ばれた伊勢神宮の荘園がありました。これまでの歴史の研究において、「大庭御厨」の成り立ちは、古代末期の土地制度を考えるためのよい材料とされてきましたが、そこに生活していた住民たちの視点という方向はあまり追求されてこなかったところがありました。そこで、伊勢神宮内神宮文庫に所蔵された『天養記』等の資料の記述をもとに、人々の生活や心のありようについて紹介しました（『天養記』とその時代については、本号の3頁をご参照ください）。

なお、本書の表紙には1969（昭和44）年に現在の鵠沼海岸6丁目で出土した8世紀後半の土師器（はじき）の坏で、内底面に「土甘（とがみ：片瀬川・引地川に挟まれた鵠沼地区を中心とした一帯の古代名）」と刻まれた文字のあるものの写真が載っています。

『藤沢市史研究　第48号』（800円）

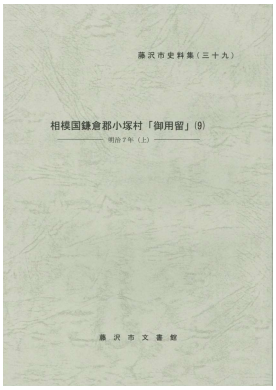
「藤沢市文書館開館40周年記念特集」として、「2014年度藤沢市史講座　藤沢の歴史を編む～地域の歴史資料と文書館～」で行われました、圭室文雄氏（明治大学名誉教授、当館運営委員会委員長）による記念講演「文書館資料が語る藤沢の近世宗教史」、およびパネルディスカッション「藤沢の歴史を編む～文書館の歩みと共に（過去・現在・未来）～」の内容を収録しました。



また、2013年度の市史講座「ビジュアル資料で読む藤沢の姿―藤沢と周辺を繋いださまざまな「道」―」での伊藤一美氏（市史編さん委員）・斎藤司氏（横浜開港資料館調査研究員）・大矢悠三子氏（市史編さん委員）による講演内容を収録いたしました。また、高野修氏による論文「一遍における神祇信仰と廃仏毀釈」を収録しました。

『藤沢市史料集（39）相模国鎌倉郡小塚村「御用留」（9）―明治7年（上）―』（700円）

「御用留（ごようどめ）」は、江戸時代後期から明治時代初期にかけてつくられた文書で、代官所などから下達された触書や廻状を、村人が諸用をはたすために書き写して残した帳簿です。本書は、現在の市内村岡東地区周辺にあった「小塚村」の名主の家に残されていた御用留の中から、1874（明治7）年の主として前半部分に村に伝えられた諸規則等を翻刻しました。



なお、これらの刊行物は、市政情報コーナーおよび文書館で購入可能です。また、現金書留および定額小為替でも購入が可能です。お気軽にお問い合わせください。（中村）

編集後記　今年は藤沢市と北部地域（御所見・長後・遠藤）との合併60年目にあたりますので、文書館で記念事業として開催する収蔵資料展を紹介しました。また、「古記録を読む」では、伊勢神宮の神宮文庫に収められた『天養記』の中から、大庭御厨について記された部分を紹介しました。（中島）